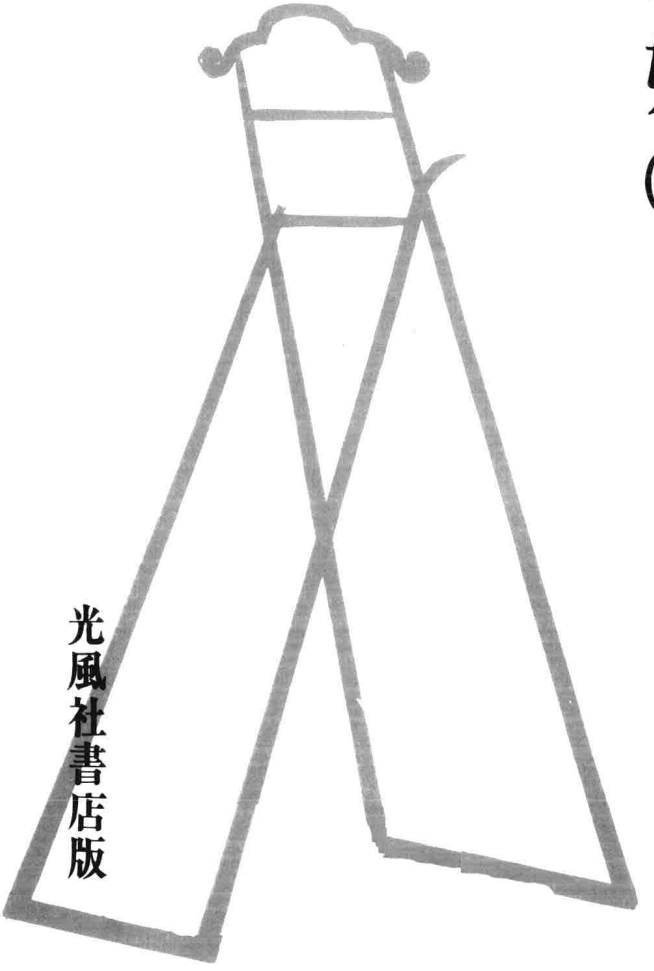
三姉妹

(下)

三姉妹（下）

大佛次郎 原作より

鈴木尚之・童門冬二



光風社書店版

三姉妹

（下）

昭和四十二年十二月五日　印刷
昭和四十二年十二月十五日　発行

検印省略

定価　三八〇円

著者　鈴木尚之
童門冬二
発行者　豊島澂
印刷者　菅生定祥

発行所　株式会社光風社書店
東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京（291）〇二三八番
振替京京一二九一三番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目
次

暗い春　七
枯れ葵　三〇
宴のあと　六一
風折れ葦　七一
砂の城　一〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

風の中に　二三五
霧の洋燈　一六一
落葉溜り　二〇六
かげろう　二三五
陽はのぼる　二四五

装幀　佐多芳郎
さしえ　三井永一

三姉妹(下)

暗い春

一

あの時……肩に何かあたった。すぐ道に落ちたものを見ると、古いわら草履(ぞうり)である。埃が肩の一隅に残っている。

キッとふりむくと、

「わあい」

と子供のはやしたてる声がし、

「異人、異人、異人の妾(めかけ)」

「赤毛が生れた目ン玉青い」

そう歌うのが聞えた。つかまらないようにかなりの距離を置いて、安全な場所ではやしたてている。

わら草履だけなら気にもしなかったかも知れない。しかし、この唄の罵倒が、むらの顔から血を引かせた。

「ピイチクパーチク異人の妾」

更に声を投げる子供たちの侮蔑は、そのまま、街の大人たちの感情でもあろう。子供たちは、街の大人の気持をそのまま代弁しているに過ぎない。

身体の隅々まで凍らせてしまうような冷たい風が、胸の中を吹きぬける。

（あたしは、街の人にそう見られている……）

鳥羽・伏見の戦いの後の混乱の中で、フランス商人ゴーチェに救われ、その邸に住むようになってから、身は潔白でも、もう世間はそういう目で見ている。ゴーチェは異国人だが、女に親切だ。日本の男のように、女を一段下に扱うようなことは決してしない。どこまでも大切に尊んでくれる。これも、はじめての経験であった。

子供たちの罵声の中に、むらは、いつのまにか自分が日本人の枠の中からはじき出されてしまった寂しさをおぼえる。街の人情は、とうにむらから日本の国籍を剥ぎ取っているのだ。日本人であって日本人でない、むらの寂しさは、そんな奇妙な場所に生きることを余儀なくされている自身へのいたわりであり、一面、挽歌でもあった。

ことに武家の妻という、日本の女の中でも一段と制約の多かった過去の生活を思うとき、いまの解放された日々が、どうにも密着せず、溶けこめないのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（私は寂しさに泣いた。子供たちの唄が、矢のように胸に刺さった）

あまりの辛さに、街の通りを泣きながら走った。頬に落ちてそのまま乾き、顔をひきつらせた涙の思い出は、いまでもありありとよみがえらせることができる。

船の往きがよいは、海に波を湧かせる。それは圧されて出来た大きな水の皺だ。その皺の上を乗り越え、乗り越え、バッテラは、陸をめざして走っていた。

正面に埋め立てたばかりの長い土地が見える。二本、海中に突き出ているのは波止場であろう。その左方に石やレンガで造られた新しい家の群が、異人館の町だ、と同行のゴーチェが教えてくれた。

横浜は俄かに脚光を浴びた漁村である。安政六年（一八五九）六月二日に、日本はここをひらいた。開港条約にもとづくものであったが、幕府は、なるべく江戸から遠い、しかも街道からはなれた出来るだけ不便な場所をえらんだ。

横浜は、その意味で格好の漁村であった。取引のための運上所を建て、来日する異国人の住居は、この運上所の後の一角と、きびしく制限した。歩く範囲も定め、勝手に遠くへ出ることを禁じた。

「この国には、攘夷浪人という危険な暗殺者がいる、外へ出て生命を失なっても、我々には安全を保障できない」

というのがその表向きの理由であったが、事実は、列強の無理押しにあって開港した手前、異国人は極力一カ所にまとめて詰めこんでおけ、という長崎出島のオランダ対策と、それはどこまでも

同じ流儀であった。

その限られた異人街に、イギリス、アメリカ、フランス、ロシヤなどの国旗が潮風に鳴っていた。

「いまは、あの町も制約された不自由な町です。しかし、われわれは、会議をつくり、共同して、われわれの町の道路、下水、税などの問題を自ら処理するようにします。居留地を、それぞれの国の本国と同じような自由な町にするのです」

脇に立つゴーチェがそう云った。異国の土地に挑む開拓商人の不敵な魂がその面上に漂っている。

ゴーチェは、神戸をひきはらい、横浜に進出してきたのだ。

「江戸はまもなく降伏する。江戸は新しい東の都になるだろう。港のない京都は、これ以上発展することはない」

異国商人らしい判断である。

「これからの日本の商業は、大坂と江戸の二都市が中心になる」

そうも云った。そして東の都市に賭けるべく、横浜行きを決意した。

あの日、古草履を投げられた日、むらはどうにもがまんできなくて、ゴーチェの邸に走り戻ると、すぐ、江戸に帰る支度をはじめた。

江戸に帰る、と云っても碌太郎のことなどいろいろ思い合わせると、それは決して簡単なことではなく、また、そのために、今日までゴーチェの所に厄介になってきたのだが、今日の侮辱は、どうにもがまんのならないものであった。

小宝という、むらになついている中国人の召使のとめるのもふり切って、なけなしの荷物をまとめはじめると、中国人の執事が走りこんできた。

「ゴーチェさん、ジョーイローニンに斬られた！　大怪我です！」

むらの荷をくくる手がとまった。恩人の怪我を見捨てて勝手なふるまいのできるむらではない。

日本人の女としての本然がよみがえった。むらは病院へ走った。そして、涙をにじませて喜ぶゴーチェに手をさしのばされると、

（ゴーチェさんが癒るまで、看病しよう）

そう心をきめた。そして、この看病が、その後のむらの運命を狂わせた。

青い波を切ってすすむ舟の前に、新開地横浜の姿がいよいよあざやかに映って来る。桟橋には、すでに出迎えの異国人や日本人が溢れている。

丘に建てられた異人館の一軒の庭に咲く、名も知らぬ真紅の大きな花が痛いようにむらの目に映った。

（あたしは、本当にここの人間になる……）

そういう実感が湧きあがって来た。

異国の土に花を植える、それは、生活の孤独感を自らなぐさめるよりも、この土地にしっかり根をおろそうというその住人の、はげしい決意を示すものなのであろう。赤い花は燃え上るように咲いていた。

舟が桟橋に着くと、色とりどりの女の衣裳がむらの目に迫った。が、むらは臆さない。むら自身が華麗な服を着ているのである。髷も解き、洋風に後でまとめている。色の白さも手伝って、それは、異国人たちが自国の女には得られない美しさであった。

舟が岸に近づき、乗っている人の顔がはっきりわかるにつれて、岸に待つ人々の中に、

「おお」

と歎声がもれた。

日本人ばなれしていた。特にうるんだ目の大きさは、異国にも共通するわかりやすい美しさであった。

岸は沈黙した。一様にむらに視点をおいたまま、その上陸を待った。岸の女たちが微妙な冷淡と嫉妬を、それぞれの顔に浮べたのも、この男たちの変化のためである。

「誰かね？　あの美人の連れは」

「ゴーチェ。新しく来たフランス商人だ」

「日本妻かね？　ラシャメンと称する」

「何でもいい。とにかく羨しい男だ」

その熱した沈黙の中に、むらはゴーチェに手をひかれて桟橋に降り立った。橋を渡りはじめると、拍手が起った。岸の男たちが一斉に手を叩きはじめたのである。

むらの美しさを讃える拍手か、それともこんな美人が長い船旅を終えたことへの祝福の拍手か、

手を拍ちあわす響は長くつづいた。
異国人の女たちが、軽侮の眼差でむらを見、ツンと鼻をあげて無視しようという姿勢になったのは云うまでもない。
陸に足をつけると、むらは、
「まだ、身体がゆれています」
と、ニッコリ笑ってゴーチェをふりかえった。ゴーチェは、やさしく、むらの身を支える。亡き夫の伊織は、一度でもこんなふるまいをみせたろうか。いや、日本の男全体が女にやさしくするのを憚って生きてきたのである。
日本の土地の上につくられた異国の町の中に、むらが一歩足を踏み出すと、
「これは、これはゴーチェさん！」
と大袈裟な声と、過剰な愛想笑いをみせながら、一人の日本人が近づいて来た。
加納屋である。
「おお、加納屋さん」
日本語の熟達しているゴーチェは、商人らしいそらさぬ笑みで応ずる。
「お怪我はいかがです？　馬鹿浪人が乱暴したと伺いましたが」
「このとおりです。すっかり癒りました。むらさんの看病のおかげです」
ゴーチェはむらをふりかえった。心持ち頬を染めるむらを見て、加納屋はチラと卑しい笑いをみ

せ、ゴーチェの腕を指で突いた。
「上玉を手に入れましたね。ゴーチェさんの横浜妻というわけですかな？」
普通なら男同志の冗談で済む会話である。だがゴーチェは表情を改めた。その前に荷物を持って従っていた小宝が怒り出した。
「おむらさま、ラシャメンない！　オクサンよ！」
「おくさん？」
目を剥く加納屋に、ゴーチェは大きくうなずく。
「そうです、妻です。こっちへ発つ時、神戸の教会で正式に結婚しました」
へえ！　と云ったきり、さすがの加納屋もあとの言葉がつづかない。
（日本の女を女房にするなんて、この毛唐は一体どういう了簡なんだろう？）
「むらさんは、お武家の娘です。永井采女という直参旗本のお妹さんです」
ゴーチェは更にそう説明を加えた。日本の武士の娘を妻にしたことを誇りたかったのである。
しかし
「永井采女様!?」
今度こそ、本当に加納屋は胆をつぶした。が、すぐ姿勢をたてなおし、むらに、
「とんだ御無礼を申しました。お気を悪くなさいませんように」
と深々と頭を下げた。むらは微笑んだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com